

# 華光大帝の変容

二階堂 善 弘

## On the Transformation of Huaguang Dadi (華光大帝)

NIKAIDO Yoshihiro

I would like to investigate the character and the origin of Huaguang (華光), and considered some gods as Wutong (五通) Wuxian (五顯) Ucchuşma (烏枢沙摩) influence on Huaguang from the viewpoint of cultural interaction. And research the relationship between the Huaguang and fire gods belief.

キーワード：火神 華光大帝 五顯神 烏枢沙摩明王

### 1. 黄檗宗萬福寺の伽藍神

江戸時代の初期、<sup>いんげんりゅうき</sup>隠元隆琦が来日し、日本で<sup>おうぼくしゅう</sup>黄檗宗が開かれると、所謂「黄檗文化」が日本の様々な分野に影響を与えることになった。その動きは、仏教文化のみならず、言語・芸術・飲食・建築など様々な方面に及んでいる。この影響は鎌倉・室町期の五山における文化交流に匹敵するものがあると言えよう。

そしてこの時期、やはり中国の道教系伽藍神が日本にもたらされている。それは黄檗山萬福寺伽藍堂に祀られる華光大帝（華光菩薩）である。この像は当時の有名な仏師である范道生によって作られたものである。この范道生と黄檗式彫刻、所謂「黄檗様」の影響について、楠井隆志氏は次のように述べている<sup>1)</sup>。

承応三年（1654）、中国の前奏、隠元隆琦（1592-1673）が長崎に渡来した。これを契機に開立されたのが臨済宗黄檗派、すなわち今日の黄檗宗である。隠元によって京都宇治の地に黄檗山萬福寺が開創されると、当時長崎に滞留していた范道生（1635-1670）というひとりの中国人仏師が招致され、大雄宝殿の十八羅漢像をはじめとする諸像を造ったことは周知の歴史である。范道生が萬福寺

---

1) 楠井隆志「黄檗様彫刻前史——一七世紀長崎の造像界と范道生——」（『日本の美術』No.507至文堂2008年・浅見龍介編「禪宗の彫刻」所収）86頁。

諸像で示した新奇な作風や形式は、隠元をはじめとする黄檗の諸高僧からも絶賛された。そのことが当時の造像界に多少なりとも影響を及ぼしたのであろう。諸高僧が黄檗宗派の全国展開を進めるにつれ、造像にあたり、萬福寺の范道生作品にみる作風や形式に倣った、いわゆる「黄檗様」が求められたと思われる。

范道生の作った華光菩薩の像は、実際に日本中の伽藍神の構造に大きく影響を与えていった。招宝七郎大権と並置されるところもあった。しかしながら、華光大帝という神格が日本ではほとんど知られていないため、華光大帝の像は誤って「関帝」であると認識されてしまうこともあった。現在でも一部にそういう認識が残っている。

ここでは華光大帝の性格と由来について広く調査し、その影響を受けたと思われる神々について、文化交渉の視点から考察したい。

## 2. 五通神と五顯神

華光大帝は、かつて華南地域において絶大な信仰を誇った神である。宋代から明代にかけて江西・浙江・福建・広東に至るまで、広い地域において信仰を集めていた。ところが、明代以後は急速に信仰が衰え、現在では福州を中心とした福建北部や、広東地域で信仰されるだけの神となってしまった。もっとも、華光大帝は同時に道教の「馬元帥」でもあり、馬元帥としての信仰は、まだ各地に残っている。

華光大帝は、非常に複雑な来歴を持った神である。恐らく幾つかの神格が複合して成り立っている神であると考えられる。まず五通神・五顯神との混淆がある。

五通神とは、やや奇怪な面を持つ神であり、その性格も善悪様々である。呂宗力・樂保群両氏の『中国民間諸神』には、次のように書かれている<sup>2)</sup>。

五顯神はかつて「五通侯」に封ぜられたことがある。世の多くの人々は、「五顯」と「五通」を名が異なるだけで同じ神であると思っている。しかし五通神の信仰は唐の時期に始まるもので、そもそも「五名の神」を意味するものではなく、妖怪変化の通称である。宋代になると、「五通」や「九聖」（『夷堅志』に見える）という名称が現れるようになるが、この「五」も「九」も実際の数ではなく、単に「多くの妖怪」といった意味合いである。（略）或いはその称号も、「木下三郎」「木客」「独脚五通」など様々なものがある。また所謂「花果五郎」「護界五郎」と呼ばれるのもそれである。この神を信奉する風俗は江南で盛んであり、明清代に至るまで継続している。『聊齋志異』には五通神の怪異について記しているが、みな猪・牛・猿の妖怪の類である。しかし民間においては非常に恐れられており、事々にこれを祀って神とした。『常熟私志』には「福德五通」としてこれを土地神とみなす記載がある。

2) 呂宗力・樂保群『中国民間諸神』（河北教育出版社2001年改訂版）555頁。

多くの資料によれば、五通神は動物の妖怪であったり、また婦女をかどわかす神であったりと、まことに行いがよろしくない。もっとも元来、民間信仰の神はそういった側面があり、恐ろしい祟りを起こす神だからこそ、これを祀って災厄が無いようにするのである。台湾でよく見る王爺の神もそうであるし、日本の牛頭天王や天神とて、そういった面を持っている。

しかし華南一帯には数多くの五通廟が存在していたようで、朱子も『朱子語類』の中で、五通廟に多くの人々が参拝することに関して言及している<sup>3)</sup>。

日本から宋に渡った成尋は『参天台五台山記』において、当時の伽藍神として東嶽大帝・平水大王・五通神・白鶴靈王についてふれている<sup>4)</sup>。すなわち寺院の伽藍神の一つとして、当時すでに五通神は重視されていたものと考えられる。

ただ、実は「五通」には別の意味もあり、「神通力」を示す場合もあった。仏典に見える「五通仙人」の場合は、まさにその意味である<sup>5)</sup>。

さらに混乱を招くのが「五顯神」の存在である。実際には邪神に近い五通神と、福神の一種である五顯神とはかなりの違いがあるのだが、両者はすっかり一体のものとして混同されている。そして華光神はまた別号を「五顯靈官大帝」といい、これまた五顯神との融合が行われている。

五顯神はまた「五聖」「五路財神」「五顯大帝」とも呼ばれることがある。ただ「五通」とは意味が異なり、五人兄弟が神となったものとされている。これについて、『中国民間諸神』の記載によれば、次の通りである<sup>6)</sup>。

五顯神は、伝承によれば唐代に始まるとあるが、実際に記録上に見えるのは宋代になってからである。『夷堅志』には五顯神や五通神の事績が多く記載されているが、五顯はあくまで「五顯」であり、五通はあくまで「五通」である。決して混同してはいない。諸書の記載によれば、五顯神の信仰は、江西の徳興と婺源一帯に流行したものである。すなわち五人兄弟の神であり、宋代には王に封じられている。封号の第一字目が必ず「顯」であることから、五顯神の称号がある。南宋の時にはその影響は江西一帯にとどまらず、都の臨安（いまの杭州）にまで及んでおり、廟が存在した。

この五顯神については『三教搜神大全』の「五聖始末」に記載がある<sup>7)</sup>。

3) 『朱子語類』巻3に見える。なお検索には関西大学所蔵の『中国基本古籍庫』を用いた。原文：風俗尚鬼、如新安等处、朝夕如在鬼窟。某一番婦郷里、有所謂五通廟最靈怪。衆人捧擁、謂禍福立見、居民纔出門、便帶紙片入廟、祈祝而後行。

4) 『大日本仏教全書』巻115（大法輪閣2007年オンデマンド復刻版）所収、成尋『参天台五台山記』巻2の閏7月8日（36頁）に東嶽大帝・平水大王・五通神・白鶴靈王の名が見える。

5) 前掲呂宗力・樊保群『中国民間諸神』553頁。

6) 前掲呂宗力・樊保群『中国民間諸神』544頁。

7) 『絵図三教源流搜神大全（外二種）』（上海古籍出版社1990年）65～66頁。原文：自是神降、格有功於国、福祐斯民、無時不顯。先是、廟号止名五通。大觀中、始賜廟額曰靈順。宣和年間封兩字侯、紹興中加四字侯、乾道年加八字侯。（略）淳熙初封兩字公。理宗改封八字王号。第一位顯聰昭応靈格広済王 顯慶協恵昭助夫人 第二位顯明昭列靈護広祐王 顯恵協慶善助夫人 第三位顯正昭順靈衛広恵王 顯済協佑正助夫人 第四位顯直昭佑靈貺広沢王 顯佑協済

五顯の神が降ってより後、国家に対して格別に功績があり、民に福祐があり、その靈驗はいつもあらたかであった。これに先んじて、廟号は「五通」という名を止めることにし、宋の大観年間には、始めて廟に額を賜って「靈順」と称した。宣和年間には二字の封号の侯爵とされ、紹興年間には四字の侯爵とされた。また乾道年間には八字の侯爵となった。(略) 淳熙年間には初めて封号二字の公爵となり、宋の理宗は改めて八字の王に封じた。

第一位 顯聰昭応靈格広済王 顯慶協恵昭助夫人  
 第二位 顯明昭列靈護広祐王 顯恵協慶善助夫人  
 第三位 顯正昭順靈衛広恵王 顯済協佑正助夫人  
 第四位 顯直昭佑靈貺広沢王 顯佑協済喜助夫人  
 第五位 顯徳昭利靈助広成王 顯福協愛静助夫人  
 王祖父啓佑喜応敷沢侯 祖母衍慶助順慈貺夫人  
 王父広恵慈済方義侯 母崇福慈済慶善夫人  
 長妹喜応賛恵淑顯夫人 次妹懿順福淑靖顯夫人

(略)

黄衣道士 紫衣員覚太師  
 輔靈翊善史侯 輔順翊恵下侯  
 朝応助順周侯 令狐寺丞  
 王念二元帥 打拱高太保  
 打拱胡百二檢察 都打拱胡靖一総管  
 打拱黄太保 打供王太保  
 金吾二太使 掌善罰悪判官

このように五顯神は五名の神であり、江西の徳興や婺源に廟があった。実は朱子が見ているのはこの婺源の方の廟であった可能性が高い。

ところで五通神・五顯神と華光大帝の共通点は、実際には驚くほど少ない。華光大帝の姿はよく知られているように、多くは青年の武神の姿で表され、三眼であり、風火輪に乗り、金磚と火槍という武器を持つ。また火神の性格を持つ。五顯神の中、一名は三眼を持つところが似ているが、その他の部分ではむしろ差異が目立つ。そもそも『三教搜神大全』においては、五顯神については「五聖始末」という項目を立てる一方で、華光神については「靈官馬元帥」の項目で説明している。これは明確に、この両神を別のものと認識していたことを示すものであろう。

---

喜助夫人 第五位顯徳昭利靈助広成王 顯福協愛静助夫人 王祖父啓佑喜応敷沢侯 祖母衍慶助順慈貺夫人 王父広恵慈済方義侯 母崇福慈済慶善夫人 長妹喜応賛恵淑顯夫人 次妹懿順福淑靖顯夫人 (略) 黄衣道士 紫衣員覚太師 輔靈翊善史侯 輔順翊恵下侯 朝応助順周侯 令狐寺丞 王念二元帥 打拱高太保 打拱胡百二檢察 都打拱胡靖一総管 打拱黄太保 打供王太保 金吾二太使 掌善罰悪判官

### 3. 華光大帝の来歴

華光大帝の形象も、中華の神としてはかなり特殊なものである。その三ツ目であり、金磚という武器を持ち、またなおかつ風火二輪に乗る形象からするに、この神は密教神の影響を受けて成立したものであると考えられる。もともと、中国には三眼の神はほとんど存在しなかった。多目の神でも、たとえば蒼頡や方相氏のように、四ツ目であることが一般的であった。三眼の神が増えていくのは、当然ながら仏教伝来の後である。

華光大帝という神格の成立については、すでに幾つかの論考がある。そのうち、黄兆漢氏によるものが先駆的であり、さらにリチャード・フォン・グラン氏、賈二強氏によるものが特に詳細である<sup>8)</sup>。

賈二強氏によれば、華光やそれに先立つ幾つかの信仰は、明らかに仏教文化の影響下に発展したものであるという<sup>9)</sup>。

仏教が民間に普及するにつれて、その幾つかの神々も民間信仰の領域内に進出していった。これと同時に、元から民間にあった神々も大量に仏教の要素を取り込んでいった。(略) 五道將軍・五通神及び五顯靈官はその代表的なものである。(略)「五道將軍」は唐宋の民間において最も広まった神の一つである。その役割は、伝統的な泰山府君や道教の司命神や仏教の閻魔王と同じで、人々の死や冥界のことを司るものである。(略) 敦煌文書の中には、このような「五道大神」が現れるものが多い。(略) 仏教の所謂「五道」とは、世間一切の衆生がこの五道の中を輪廻し、それが非常に苦痛を伴うものであると認識に基づいたものである。(略) 一方で、仏教經典の中には神としての五道の名も見えている。(略) また五通神も、もともととは外来のものであり、やはり仏教の影響を受けたものである。仏家の講ずるところの「五通」と密接な関係を持つ。所謂五通とは、修行者が得たところの神通力を指して言うのである。(略) もしこの五種類の神通を得たのであれば、それは「五通神仙」或いは「五通仙人」と呼ばれるものとなるのである。(略)「華光」という名称も、常に仏教經典に見られるものである。もともととは仏家の菩薩の一人であった。華光の本来の意は蓮華の光明というもので、仏家の祥瑞である。(略) 華光菩薩といった場合、一般的には釈迦牟尼如来が十大弟子の一人で、智慧第一とされる舍利弗を指す場合が多い。

すなわちまず五道將軍の信仰があり、五通神と五顯神の信仰が発展し、さらにもともとは仏家の菩薩であった華光の信仰が発展したものであるという<sup>10)</sup>。

舍利弗が華光菩薩とされるのは、『法華經』譬喻品に見える話に基づいている。すなわち、釈迦如来が

8) 黄兆漢「粵劇戲神華光是何方神聖」(『中国神仙研究』台湾学生書局2001年) 49～87頁、リチャード・フォン・グラン Richard von Glahn, "The Sinister Way - The Divine and the Demonic in Chinese Religious Culture-", University of California Press, 2004年、及び賈二強『唐宋民間信仰』(福建人民出版社2003年) 338～372頁。

9) 前掲賈二強『唐宋民間信仰』338～366頁。

10) また五道將軍については、小田義久「五道大神攷」『東方宗教』48号1978年14～29頁も参照。

舍利弗に「華光如来」という仏になることを授記していることから来るものである<sup>11)</sup>。しかしながら、華光大帝と舍利弗との共通点はこれまたほとんど見いだせない。

なお一般的な華光大帝の伝は、『三教搜神大全』の「靈官馬元帥」の項目に見えている<sup>12)</sup>。

馬元帥の来歴を見るに、およそ三たび聖を顕わされた。もとは妙吉祥の化身であったが、妙吉祥が焦火鬼を焼き殺したために、釈迦如来は心を痛められ、妙吉祥を下界に降した。そこで五つの火光となって馬氏金母のもとへ投胎した。その面には三眼があり、よって三眼靈光と名付けられた。生まれて三日で戦うことができ、東海龍王を斬って水孽を除いた。次に紫微大帝の金鎗を盗んだ。(略) また金磚三角を授かり、これは変化無辺の宝物であった。そして玉帝の命を受けて風火の神を討伐し、これを部下の風輪火輪使とした。(略) その母が亡くなったために地獄に入った。元帥は、海中を行き、天界を走り、酆都に進み、鬼洞に入り、哪吒と戦い、仙桃を盗んで、齊天大聖と敵対した。釈迦如来は元帥を和解させた。(略) 玉帝はその功績が天地に等しいものとみなし、勅して馬元帥を玄天上帝の部下とした。

この話はまた脚色されて、明末に余象斗によって『南遊記』という小説に改変されている。まず注意すべきことは、華光大帝は同時に「靈官馬元帥」という神となっていることである。馬元帥は道教の元帥神の一種で、特に四大元帥(温元帥・関元帥・馬元帥・趙元帥)の一として重視されるものである。あたかも関帝が道教側では「関聖帝君」、仏教側では「関菩薩」として双方で重んじられるのと似ているかもしれない。すなわち、華光大帝は道教側では「靈官馬元帥」、仏教側では「華光菩薩」という形で祭祀されているのである。

華光大帝の持つ武器として有名なのは、金磚である。金の三角形の形をしたもので、これを投擲すると相手を殴打してまた手元に戻ってくる。また金の槍を持ち、風火の二輪に跨がって移動することが知られている。この風火の二輪は、いまでは哪吒太子の乗り物として知られているが、それは『封神演義』になって附会されたものであり、実は華光大帝の方がその由来は古い。そして重要なのは、華光神は火神であるということである。もっとも、四大元帥の一つとしては西を守護するので、南方火の性格であると言い難い面もあるが、基本的に華光は火の精、火の神とされる。

またこの伝承によれば、華光大帝は「妙吉祥」との称がある。妙吉祥とは文殊菩薩の別号である。密教經典には『仏説妙吉祥菩薩陀羅尼』や『大聖妙吉祥菩薩説除災教令法輪』などの妙吉祥菩薩の功德を説いたものがあり、また不空三蔵訳とする『仏説熾盛光大威徳消災吉祥陀羅尼經』は消災の經典として

11) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華經』(岩波文庫1962年)上巻150頁。

12) 前掲『絵図三教源流搜神大全』220～221頁。原文：詳老帥之始終、凡三顯聖焉。原是至妙吉祥化身、如来以其滅焦火鬼墳有傷于慈也、而降之凡。遂以五団火光投胎于馬氏金母。面露三眼、因諱三眼靈光。生下三日能戰、斬東海龍王以除水孽。繼以盜紫微大帝金鎗。(略)乃授以金磚三角、變化無辺。遂奉玉帝勅以服風火之神、而風輪火輪之使。(略)又以母故而入地獄、走海藏、歩靈台、過酆都、入鬼洞、戰哪吒、窃仙桃、敵齊天大聖。釈仏為之解和。(略)玉帝以其功德齊天地而勅元帥于玄帝部下。

広く知られている<sup>13)</sup>。これらの經典に見られる妙吉祥菩薩の方がむしろ華光大帝のイメージに近い。

華光大帝の初期の姿と思われるものは、胡文和氏が紹介している四川の石窟に祀られる南宋期のものである<sup>14)</sup>。この像は「五通大帝」とされるものだが、魁偉な容貌であり、三眼ではなく、さらに片方の足を挙げている。これを明代の一般的な華光の像と比べると、全く異なる形象である。むしろ、日本において祀られる蔵王権現の姿に似ていると言えよう。

特にその片足を挙げるところは、影響関係があるのではと疑わせるものがある。この像が何故片足を上げるのかと言え、すなわち仏教における「独覺」が訛した結果、「独脚」となり、それが像に反映したものと考えられる。

さらに馬元帥華光については、謝世雄氏が重要な指摘を行っている。すなわち華光の形象は、ウッチュシュマ神 (Ucchuşma) の影響を蒙っているのではないかという説である<sup>15)</sup>。ウッチュシュマは、日本では烏枢沙摩明王として知られている。烏枢沙摩明王も火神であり、片方の足を上げる像が知られている。

彌永信美氏の考察によれば、ウッチュシュマも複雑な性格を有する神である<sup>16)</sup>。

さて、ウッチュシュマはどちらかという後期密教で重要な役割を果たす尊格で、中国の仏典では、この尊格について述べたものはあまり多くない。そのなかで、ここでとり挙げておくべきなのは、ひとつは『大日経疏』の自在天降伏に関する一節、もうひとつは『大仏頂首楞嚴経』に見られる「火頭金剛」という名の由来譚である。まずこの後者から見ていこう。『大仏頂首楞嚴経』は密教部に収録されているが、むしろ禪宗で珍重された重要な經典だが、じつは八世紀初頭の中国で作られた偽經であることが知られている。その巻第五で、驕陳那五比丘や優婆尼沙陀、香嚴童子などの仏弟子・菩薩・天部にまじって、烏芻瑟摩が自身の過去生を振り返り、証知した境界を述べる箇所がある。それによると、過去世において、烏芻瑟摩は特別に貪欲な性質の持ち主だった。その時、空王と呼ばれる仏が世に出て、「多淫人は猛火聚（猛火のかたまり）を成す」ことを説き、百の死体の四肢を観じることを彼に教えた。その教えに従って、彼は「もろもろの（体内の）冷氣・暖気の神光を内に凝らし、多淫心を化して智慧の火と成す」ことに成功した。それゆえに、諸仏は彼を「火頭」と呼ぶ。こうして彼は「火光三昧の力をもって阿羅漢心を成し、大願を発して、諸仏成道の時、力士となって魔怨を降伏する」ことになった、という。

しかしその中心となるのは、やはり火の神、火神としての性格である。そういった意味では、やはり火の神である華光との性格の類似はある。すなわち、華光神はウッチュシュマ神を源流とする神である可能性が高い。

13) 『大正大藏經』密教部に収録。

14) 胡文和『四川道教仏教石窟芸術』（四川人民出版社1994年）17頁。

15) 謝世雄「Exorcism in Buddho-Daoist Context: A Study of Exorcism in the Method of Ucchuşma and Luminous Agent Marshal Ma」（「宗教与文化的多元対話」学術座談会資料<http://litera.ccu.edu.tw/2011religion/hsieh.pdf>）による。

16) 彌永信美『大黒天変相』（法蔵館2002年）230頁。

さらに彌永氏の指摘によれば、そもそもウッチュシュマ自体が、ヒンドゥーの火神アグニ（agni）と同一神であるとされる<sup>17)</sup>。また五大明王の金剛藥叉明王との関連も指摘される<sup>18)</sup>。ある意味では、共にヒンドゥーの火神アグニの変容と考えられよう。すると、華光大帝の源流も、火神アグニにあると想定することも可能である。同様の例は、哪吒太子や殷元帥などにも見いだすことができる。ただ、これらの神々の相互影響については、もっと多くの事例をもとに考えるべきであろう。いまはその可能性のみを指摘しておきたい。

---

17) 前掲彌永信美『大黒天変相』236頁。

18) 前掲彌永信美『大黒天変相』249頁。